

中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	山科 満		
NAME	MITSURU YAMASHINA		

中央大学特定課題研究費による研究期間終了に伴い、中央大学学内研究費助成規程第15条に基づき、下記のとおりご報告いたします。

1. 研究課題

東日本大震災被災者の回想的語りの分析～震災後10年を経て～

2. 研究期間

2020・2021・2022年度 ※2022年度は新型コロナウイルス感染症特例対応により1年間延長

3. 費目別収支決算表

掲載省略

4. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

（和文）東日本大震災は発生から10年余を経て、表面的には復興が進み、行政の関心も次第に東日本大震災から離れてきている。しかし、現場で支援を継続している人たち（例えば被災自治体の保健師など）からは、被災者の精神面での支援に関する課題は多く挙げられており、被災者には今後も継続的な支援が必要であると考えられる。

申請者は2011年3月から継続して北東北の某村に支援を行ってきた。多くの被災者と継続的に関与してきたが、その人たちの被災の受け止め・乗り越え方は個々の違いが大きかった。本研究では、被災者個々人の被災の受け止め方やその時間的な変遷、それと関連する心的外傷からの回復過程について記述し、一般化できる要素を抽出することを目的とした。

2020年4月から本研究は開始されたが、コロナ禍が発生し、現地での調査は長く不可能であった。2022年夏以降、流行が下火になった時期に現地での調査を行ったが、新たな研究協力者との出会いは叶わず、継続してお会いできている人たちから直近の状況を尋ねるに止まった。ただしコロナ禍の間に、高齢者を中心に病死や認知症による施設入所などのため、関与が不可能となる人も多かった。

面接できた人たちの語りからは、心的外傷の様態や、それが日常生活（とりわけ対人関係）にどのような影響があるかということ聞き出すこととなった。被災の傷は全く癒えていないにもかかわらず、地域社会としては復興が進み、被災体験が個人の心の中に未消化のまま社会的には封印されつつある状況が垣間見られた。

（英文）

The narratives of the victims of Tohoku Earthquake inform us on the nature of their trauma and how it affected their daily lives, especially their interpersonal relationships. Although the trauma have not healed at all, the reconstruction of the community has progressed, and we were able to glimpse a situation in which the disaster experience remains unsolved in the minds of individuals and is being sealed off from society.